

監修者のことば、「空間の合唱」プログラム、p7、1979
初出 地球19、p35、1979

●監修者———中村とうよう ニューミュージック・マガジン編集長

今回の芸能山城組の公演は、「空間の合唱」というタイトルで催されるわけだが、僕にとっては彼らにはこのタイトルなどはことさら付ける必要がないようにも思える。人間の声はもともと肉体性というものがその本質である限り、動きといった空間性とは切り離せないものだと考えるからだ。それは例えば、世界各地の民族音楽やロック、ブラックミュージックなどをみると、その音楽は必ずそれを生み出した社会背景をもっていて、その楽しみ方にしても、それにふさわしい踊りなどの動きを伴っている場合が多い。つまり、空間性は音楽の本質をつくっている要素のひとつであり、近代の西洋音楽のように音だけがそういったものと全く無関係に存在しているものは、むしろ例外に属するだろう。

芸能山城組は、日本の音楽界のかかえているこの問題にはやくから着目し、意欲的に取り組んできた。彼らの歌が多く若い人たちの間にとっても魅力的なものとして受けとられているのはしごく当然のことだろう。今回の公演は、こうして音楽の本質をふまえながら山城組が行ってきた独自の試みを、特に“空間性”に重点をおいてつくりあげ、披露するもので、実に楽しい企画だ。(談)